

---

# しらたま伝説(レジェンド)

ナオキ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

しらたま伝説<sup>レジエント</sup>

### 【Nコード】

N1132Y

### 【作者名】

ナオキ

### 【あらすじ】

そよ風の吹く静かな草原。そこを歩く二つの影。

6年前、水面下にいたロケット団の残党を根絶した一人の青年・ナオキとパートナーポケモンのマグマラシは、それからしばらくの間旅に出ていた。

それから6年後、二人は再びこの場所に戻ってきた。

二人が訪れた場所は、ジヨウト地方のタウンマップにも詳しく載っていない草原だった。そこは、マグマラシの故郷であり、ナオキにとって全ての始まりの場所であった。

二人が旅からここへ戻ってきたのは、新たな始まりの序章だった…

## 紹介（前書き）

私が2007年から構想していたポケモン小説です。

この話は、ポケモンと遊戯王の合作であり、何よりの特徴は『人間がポケモンと同じ位置に立って戦う』という事です。

そのため、多少の流血表現もありますので、ご注意を。

マグマラシとあるカードとの出会いから誕生した今までにないポケモンストーリーを楽しんでいただけたら幸いです。

人間とポケモンが織り成す激戦と感動の物語をご堪能あれ！

## 紹介

そよ風の吹く静かな草原。そこを歩く二つの影。

6年前、水面下にいたロケット団の残党を根絶した一人の青年・ナオキとパートナーポケモンのマグマラシは、それからしばらくの間旅に出ていた。

それから6年後、二人は再びこの場所に戻ってきた。

二人が訪れた場所は、ジョウト地方のタウンマップにも詳しく載っていない草原だった。そこは、マグマラシの故郷であり、ナオキにとって全ての始まりの場所であった。

二人が旅からここへ戻ってきたのは、新たな始まりの序章だった…

私が2007年から構想していたポケモン小説です。この話は、ポケモンと遊戯王の合作であり、何よりの特徴は『人間がポケモンと同じ位置に立って戦う』という事です。

そのため、多少の流血表現もありますので、ご注意を。

マグマラシとあるカードとの出会いから誕生した今までにないポケモンストーリーを楽しんでいただけたら幸いです。

人間とポケモンが織り成す激戦と感動の物語をご堪能あれ！

## 登場人物紹介

### 登場人物

#### ナオキ（トライス・ライト）

主人公の一人。光の守護神ガーディアン・トライスに導かれ、ポケモンの世界を護るために戦う事になった。

普段は「ナオキ」という名の一般人でいる。

戦いの時になると、トライス・ライトに変身する。

必殺技は、閃光の双剣 トリス を駆使した技で、代表は「トリス・ライトニング」や「トリス・スラッシュ」などである。

他に、カードから様々な物を具現化して攻撃やサポートをする「カード真拳」や今回から登場する新技がある。

仲間に対してはとても温和で、純粋な悪に対してはとても厳格な正義感の強い性格である。

仲間思いな人物でもあり、大事な仲間を護るために無茶をする事がよくある。

今回はシンオウ地方の平和を護るために旅に出る。

#### マグマラシ

#### かざんポケモン

高さ：0.9 m  
重さ：19.0 kg

ヒノアラシの進化形。ナオキのパートナー。

故郷の草原にいた頃は見た目の怖さから周りから避けられ、それによりすれ違う者に暴力を振るったり、略奪をしたりする悪者になってしまった。

ナオキと出会った事により、優しさに気付き旅を通して仲間思いのポケモンに成長した。

必殺技は「だいもんじ」とガーディアンにより使えるようになった「ブラストバーン」。

他にも未知の技が使える。

見た目とは裏腹に、とてもセンチメンタルな性格で、ナオキの事が心配になるとすぐ涙を流す。

炎の守護神ガーディアン・シールは、「彼は我々からも想像がつかない力を秘めているのかもしれない」と言っている。

今回の話でも、それが明らかになるかもしれない。

## ガーディアン

聖地エレメンタルに住む6人の守護神達。

それぞれ「光」「炎」「風」「地」「水」「闇」の属性を持っている。

また、それぞれに導きの武器がある。

例として光の守護神ガーディアン・トライスや炎の守護神ガーディアン・シールなどがある。



ガーディアン・トライスは「閃光の双剣 トライス」、ガーディアン・シールは「流星の弓 シール」が導きの武器である。

その他のガーディアンは今後の話で明らかになる。

## 序章：草原

広い草原にそよ風が吹く。

草原の草は風というリズムに合わせて踊っているように風にたなびいている。

そこに2つの影があった。

一つは人間、もう一つはポケモンのようである。

2人は何かを話しているようだった。

「ここに来るのも久しぶりだな。」

「そうだね。今までいろんな所を旅してたからしばらくここに戻らなかっただけにね。」

「どれくらい戻らなかったんだ？」

「もうかれこれ6年は経つんじゃないかな？」

「随分長いな…。もうそんなに年月が過ぎてたのか。」

ちなみにこのギャップはポケモン金銀とダイヤモンド・パールのブランクとほぼ同じである。

「ロケット団の残党をぶつつぶしてからオレ達いろんな所を旅したよな。」

「あの時は大変だったよね。」

彼らは6年前、ジョウト地方でグレイ率いるロケット団の残党と戦い、その野望を打ち砕いたのだった。

戦いが終わり、ジョウト地方が平和になった後、彼らはしばらく普通のポケモントレーナーとして全国を旅していた。

そして今日、再びここに戻ってきたのだ。

ここは彼のパートナーポケモンの故郷なので、時折帰る時はあったのだが、ある場所へ戻るのは6年ぶりなのである。

しばらく歩くと2人は足を止めた。

2人の目の前には大きな崖のような岩壁があった。

そこに向かって青年は言った。

「ガーディアンの皆さん！私です！久しぶりに戻って来ましたよ！開けて下さいーい！」

青年がこう言うと、どこからともなく声がした。

「久しぶりだね。今開けるから待ってて。」

謎の声の主がこう言った後、岩壁の向こうから音がした。

コトコトコト...

この音と共に、岩壁が自動ドアのように開いた。

「相変わらず入口はこうなんだな。」

「6年前と全く変わってないよね。私達みたいに。」

青年はこう言うとパートナーポケモンと共に中へと入っていった。

彼らが入ると岩壁は再び閉じていった。

彼らはしばらく歩き続けた。

やがて、向こう側から光が見えてきた。

光を抜けるとそこはさっきいた所とはまるで別世界の空間だった。

真ん中に公園の噴水のような泉が湧いていて、周りはとても広い野原だった。

泉の向こう側にはまるで遺跡のような建物があった。

「ここも変わってねえな。」

「6年前と全く同じだね。」

2人がそう言うと、どこからともなくまたあの声が出た。

「よく来たね、2人共。」

「その声はトライスさん。」

青年は声のした方を向いて言った。

彼の向いた先に幽体の体を持った人間の姿があった。彼の名は光の守護神「ガーディアン・トライス」。属性から「トライス・ライト」とも言う。

「君たちも元気そうだね。ナオキくんはマグマラシくん。」

青年の名は「ナオキ」、ポケモンはマグマラシのようである。

「君たちがここを離れてから僕達はずっと君たちにまた会えるのを待ってたんだよ。」

「あれからいろんな所を旅していたんです。ジョウトを基本にカントーやホウエン地方も行きましたよ。」

ナオキはトライスに言った。

「随分と遠い所に行ったんだね。」

トライスは返答した。

「それで話を変えますが、今回ここに呼んだ理由は何ですか？」

「…君たちにまた戦いに出てほしい事があるんだ。」  
トライスは少々気まずそうに言った。

「戦いに？」

「そう。また新たな悪の組織が現れたんだ。」

「悪の組織？」

「今度はかなり手ごわいとも言われてるんだ。詳細は今から話すからついて来て。」

そう言うとトライスは遺跡のような建物の方へ向かっていった。

「行こう、マグマラシ。」

「おう。」

マグマラシはそう言うと、ナオキと共にトライスの後を追いかけた。

ここは「聖地エレメンタル」という場所である。

ガーディアン達が住んでいる場所であり、マグマラシ達の本拠地でもある。

詳細についてはまたどこかで話す。

マグマラシとナオキはその奥にある遺跡のような所へ入っていった。

そこには様々な武器が安置された台座があった。台座はそれぞれ6つあり、そこに1つずつ武器が安置されている。

ナオキ達が来るとそこからガーディアン・トリスを含む様々なガーディアン達が現れた。

「久しぶりね、ナオキくん。マグマラシくん。元気そうだなによりだわ。」

そう述べたのは、風の守護神ガーディアン・エルマである。蝶の短剣 エルマ に導かれし守護神である。

「あの時と全く変わってないな。」

続いてそう述べたのは地の守護神ガーディアン・グラールである。恐竜の姿をしていて、ガーディアン達の中で最も攻撃力が高い。重力の斧 グラール に導かれしガーディアンである。

「あれ？ ケーストさんとシールさんとバオウさんは？」

「今から来るそうだから先に話を進めてほしいとの事だ。」

ガーディアン・グラールが返答した。

「ガーディアンって常に武器の中にいるわけじゃないんだな…。」  
とマグマラシが言った。

「『導く』だからそこに居座ってるわけじゃないんだろっね。」

ナオキはマグマラシの言った事に対する返答をした。

「それじゃあ始めようか。今回はロケット団の時よりもかなり大変な事みたいだからね。」

ガーディアン・トライスはそう言うと、早速本編から話を始めた。



## 第1話新たな脅威

ガーディアン・トライスは話を始めた。

「今回君達に行ってほしい所はここだよ。」

ガーディアン・トライスはそう言うと、右手で向こう側を指差した。指差した所に映像が現れた。

映像には、まるで北海道と形の似た大陸が映っていた。

「ここは？」

ナオキが問いかけた。

「ここは『シンオウ地方』。ジョウト地方から東の方にある地方だよ。カントー地方をまたいでね。」

ガーディアン・トライスが返答した。

返答した後、ガーディアン・トライスは話を続けた。

「ここシンオウ地方は、昔から『神』と呼ばれたポケモンが住んでいると言われているんだ。一人は『時』を司り、もう一人は『空間』を司るポケモンと言われているそうだよ。」

「随分とスケールでええな…。」

マグマラシ呟くように言った。

そう思うのも無理はない。

今まで彼らが出会ってきたレジェンドは海を護る者や、大地を変動させたり、雨を自在に降らす事ができるポケモンなどであった。

今回のレジェンドはまさに「世界の存在そのもの」を司っているようなものなので、それを考えればまさにスケールのでかい存在と言うのも、「神」と呼ばれるのも納得できる。

「そう。今回のレジェンドはまさに世界そのものを司っていると  
言っても過言じゃないんだ。」

ガーディアン・トリスはマグマラシに言った。

「それで今回はここが戦いの舞台になるというわけなんですね。」

ナオキは念押しでガーディアン・トリスに問いかけた。

「そうだよ。そして、今回君達に依頼したいのは…」

ガーディアン・トリスはそう言うと言像に指で触れた。

映像が切り替わった。切り替わった映像にはたくさんと同じ服を着た人が映っていた。

「何だこいつらは？」

マグマラシが言った。

「ここシンオウ地方にいる悪の組織『ギンガ団』だ。」

「ギンガ団？」

「そう。君達がかつて戦った『ロケット団』に相当する組織だよ。」  
ナオキの言った事にガーディアン・トライスが返答した。

「さっき僕が言った神と呼ばれるポケモンを狙っているんだ。」

「何のためにだ？また世界征服とかなんかのためか？」  
とマグマラシが言った。

「伝説のポケモンを狙うだけにそういう可能性はあるね。」

ガーディアン・トライスはマグマラシに言った。

「でも、詳しい目的はまだわかっていないんだ。まだ活動を始め  
そんなに経ってないからね。」

ガーディアン・トライスは理由があるとはいえ、少々気まずそうに  
言った。

「少なくともわかってるのは彼らはシンオウ地方の人達を苦しめ  
ているという事だ。」

ガーディアン・グラールが言った。

「私達が今まで仕入れた情報によると、これまでにトレーナーを襲  
つたり、ポケモンや金めの物になる物を略奪したり、下手すれば命  
を奪われかねない事をする時もあるそうよ。」

ガーディアン・エルマが続けて述べた。

「今回はかなりヤベーのが相手みたいだな。」

「そのようだね。」

彼らが6年前に戦ったロケット団は残党の集まりによって結成されたのに過ぎなかった。

今回はかなり巨大な組織である事は間違いないようである。

その時…

「おーい、待たせたな！」

「随分遅れちまったぜ。」

「話ほどのくらい進みましたか？」

マグマラシ達が来た時にいなかった3人がようやく現れた。

来た順に、

炎の守護神ガーディアン・シール

闇の守護神ガーディアン・バオウ

水の守護神ガーディアン・ケースト

である。

ガーディアン・シールは流星の弓 シール に導かれしガーディアン。ガーディアンの中で一番小回りがきく能力値を兼ね備えている。獣のような姿をしているが、炎族である。

ガーディアン・バオウは破邪の大剣 バオウ に導かれしガーディアンで、見た目は悪魔そのものだが、純粹な正義の心を持つ。闇を悪だと絶対視してはいけない事が強調される。

ガーディアン・ケーストは静寂のロッド ケースト に導かれしガーディアン。人魚の体をしていて、いろんなものから身を守る能力を持っている。

「随分と遅かったね。いったい何があったの？」

ガーディアン・トライスは彼らに言った。

「色々と情報収集してたんだ。シンオウ地方って意外に広くてよ。予想外に時間がかかったんだ。」

ガーディアン・バオウが返答した。

「なるほど…それで何か新しい情報はわかったかい？」

ガーディアン・トライスは言った。

「ギンガ団についての情報はありませんでした。ですが、地方についての情報は色々と手に入りましたよ。」

ガーディアン・ケーストが返答した。

「今のところ変わった事といたらシンオウ地方には3つの湖があるって事だな。」

ガーディアン・シールが続けて述べた。

「3つの湖？」

「ああ。しかもその湖には祠みたいなものがあったんだ。」

ナオキの問い掛けにガーディアン・シールが答えた。

「祠みたいなものですか？」

「そうだ。その中から何かがあるような気配を感じたんだが、姿らしきもんは確認できなかったな。」

「何もなかったという感じでしょうか？」

「いや、全くという程じゃない。何か薄い幽体みたいなものが湖の水面に浮かんでるのを目撃したぞ。あれは何だったんだろうな……。」

「薄い幽体みたいなもの……。」

ナオキはしばらく考え込んでいた。

「君達がわかっている情報は今のところそれくらいかな？」

ガーディアン・トライスが3人に対して言った。

「そうだな。今のところはこれで全部になるな。」

ガーディアン・シールが答えた。

「わかった。ありがとう。」

「いって事よ。」

ガーディアン・トリスの一言に対してガーディアン・バオウが答えた。

「ガーディアン達でもそんなに時間がかかる程今回はかなり広い所なんだな。」とマグマラシが言った。

「今まで以上に歩く事になるかもしれないね。」とナオキがマグマラシに言った。

「あ、そうだ。まだ大事な事があったんだった。」

とガーディアン・トリスが慌てて映像を出した。

映像にはポケモンのような生き物が映されていた。

「トリスさん、これは？新しいポケモンですか？」

「そう。しかもこのポケモンはさっき僕が言っていた伝説のポケモンの一人なんだ。」

「マジでか！？なんでそんな重要なもん今まで出さなかったんだ？」

マグマラシは驚いた様子で言った。

「ごめんごめん。話をしてるうちにすっかり忘れちゃってたよ。」

ガーディアン・トライスは少々赤面しながら言った。

「それで、このポケモンは何ですか？」

ナオキがあらためて質問した。

「これはシンオウ地方の神話に登場している空間を司るポケモンで、名前は『パルキア』って言うんだ。」

「パルキア…空間を司るポケモンか…。」

「さっき言ってた神と呼ばれてるポケモンの一人ってわけか。」

「そう。また、パルキアしか覚えない技もあるんだ。」

マグマラシの言った事に対してガーディアン・トライスが返答した。

「もう一人のレジエンドはないんですか？」とナオキが言った。

「あいにく今はこれしかないんだ。もう一人はこれから見つけに行くから待っててね。」

「わかりました。お願いしますね。」

ナオキはガーディアン・トライスに言った。

「それじゃあ早速シンオウ地方に向かう事にしよう。」



「え？でもどうやってですか？」

ナオキはガーディアン・トライスに言った。

それもそのはず、今彼らがいる場所はジヨウト地方である。

そこからシンオウ地方へはかなりの距離がある。

空を飛ぶポケモンがないのではそこへ行くのにはかなり時間がかかる事になるのだ。

「それなら大丈夫。ここ聖地エレメンタルはわかっている場所ならどこへでも行けるようになるんだ。君達が入ってきた入口からすぐに行けるよ。もちろんこれまで通りマグマラシくんの故郷の草原に行く事もね。」とガーディアン・トライスは言った。

「すごいなあ…聖地エレメンタルにそんな秘密があったなんて…。」

「世界の平和を護る以上、これくらいの事はしないといけないからね。」

ガーディアン・トライスは常識では筋の通らない事を簡単な理由でどこへでも行ける理由を述べた。

別の言い方で例えるなら「ハルの動く城」みたいなものである。聖地エレメンタル本体は移動しないのだが。

「もうシンオウ地方に行けるはずだよ。出口を出ればすぐにシンオウ地方になってるからね。」

「それじゃあ早速行こうか。」

「おう！オレ達がまだ行った事のない新しい地方に行けるなんてワクワクワクワクするぜ！」

マグマラシはかなり張り切っていた。

「君らしいね。よし、じゃあ早速出発しよう。」

「おっしゃー！」

マグマラシは張り切った様子で行った。

「あ、そうだ。ナオキくん、これ持ってきなよ。」

そう言うとガーディアン・トライスはナオキに一冊の本を渡した。

「これは？」

「シンオウ地方のポケモンが載ってる本だよ。」

「つまり、ポケモン図鑑みたいなものですか？」

「そう。あいにく本物が用意出来なくてね…。」

ガーディアン・トライスは気まずそうに言った。

「いいえ、いずれにせよこの地方のポケモンを知るいい資料になりますから喜んで使わせていただきますよ。どうもありがとうございます。」

「僕の方も気にいってくれてありがとね。」

「はい。では行って参ります。」

そう言うとナオキは聖地エレメンタルの出口に入ってしまった。

出口にはマグマラシが待っていた。

「どうしたんだ。早く行こうぜ。」

マグマラシは急くようにナオキに言った。

「OK!それじゃああらためて行こうか。」

「おう!」

マグマラシがそう言うと二人は走り出していった。

二人の新たな冒険が、今始まる!

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1132y/>

---

しらたま伝説(レジェンド)

2011年11月1日01時00分発行